

在来マス（スギノコ）調査

I 目 的

スギノコの生態に関する調査を行なうことによって将来における資源維持のための資とする。

II 調査内容

- | | |
|----------|---|
| (1) 調査期間 | 自 昭和44年4月 1日
至 昭和45年3月31日 |
| (2) 調査員 | 次 長 頼 茂
相坂養魚場技師 佐藤直三 |
| (3) 調査場所 | 下北郡大畑町 大畑川 |
| (4) 調査項目 | イ) スギノコに関する魚体並びに産卵生態調査
ロ) スギノコ種苗生産試験 |

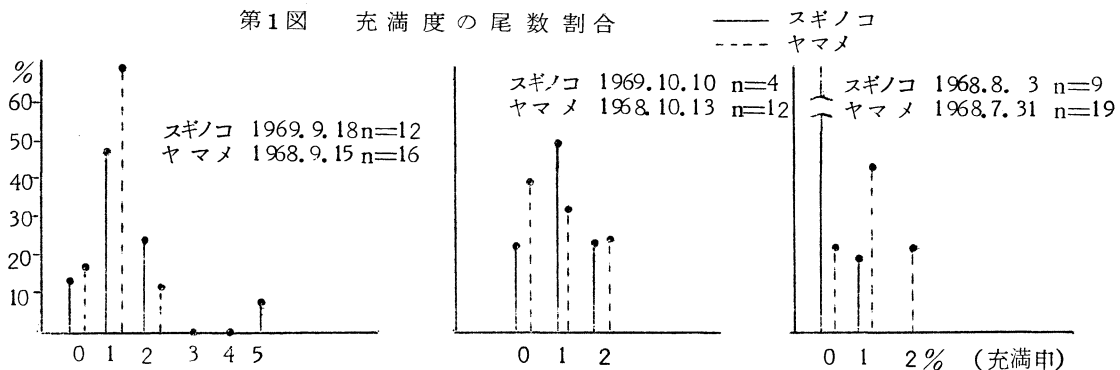
III 調査結果

- (1) スギノコの産卵は9月上旬から10月中旬にかけて、水温が10℃～15℃の間で行なわれるようである。
- (2) 産卵は雌雄各1尾によって行なわれ、魚体は雌雄とも同じ大きさである。
- (3) 産卵床は円形又は長楕円のものが多く、大きさは1.0m²以下で、その深さは20cm内外、流速は0.3 m/sec以下のところが多い。
- (4) 性比について X^2 の検定ではスギノコは雌雄各々同数が棲息しているものと思われる。
- (5) 摂餌量は9月より10月の方が多い傾向を示している。(第1図)
- (6) 8～9月にかけての1年魚の雌の卵巣重量は体重の0.5%から7.2%を占めている。
- (7) スギノコの0年魚は10月上旬頃までに平均体長10cm位に成長する。(第1表, 第2図)
- (8) スギノコは魚体の大小に関係なく時期的に本流と支流に棲み分けをせず、周年を通じて夫々の棲息する河川に定住するものと思われる。
- (9) 種苗生産実績は第2表のとおりである。

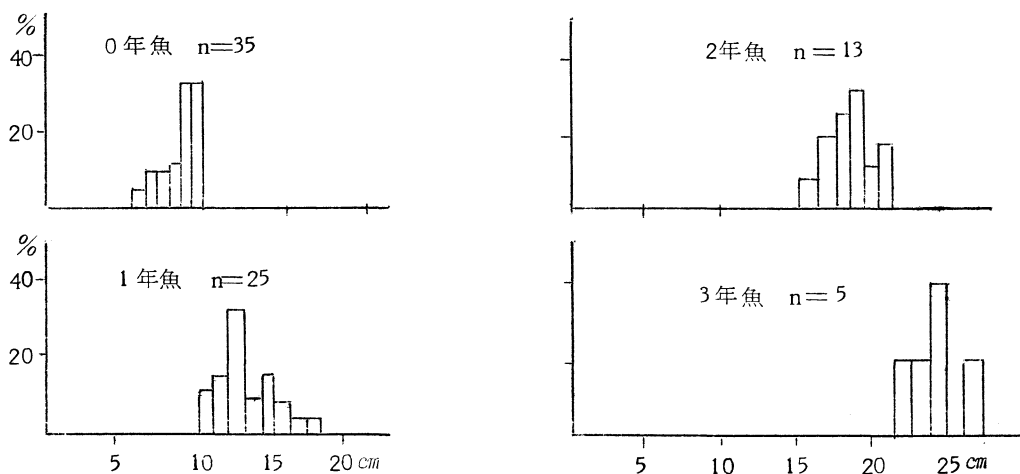
IV 今後の課題および問題点

- (イ) 種苗生産技術の見通しを得たので今後は量産体制に入るために親魚の養成が急務である。
- (ロ) 人工飼育したこれ等在来マスを天然河川に帰したとき、生育に並びに生活行動等生態面について天然産のものとの比較検討及び再生産の問題並びに経済効果の有無等、放流効果全般についての試験調査を行なう必要がある。

第1図 充満度の尾数割合



第2図 年令別体長組成



第1表 0年魚(B L)成長調査

	5	6	7	8	9	10	計	平均
4 3. 8. 3	1	3	2	2	1	0	9 尾	6.8 2
4 3. 9. 13	0	0	0	0	3	5	8	9.7 2
4 4. 9. 18	0	0	1	2	5	3	11	8.9 3
4 4. 10. 10	0	0	0	0	0	2	2	10.0 0

第2表 44年度種苗生産実績(45.3月末)

	スギノコ	養殖サクラマス
採卵粒数	905 粒	20,079 粒
発眼卵生産粒数	715 粒	14,529 粒
発眼率	79 %	62.5 %
浮上率	56.5 %	72.6 %
稚魚生産尾数	404 尾	8,000 尾
採卵親魚数	4 尾	42 尾
採卵年月日	44年10月1日	44年10月15日, 22日29日